

沖縄県宮古島市島尻地区のパーントゥに関する 宮良保氏（島尻自治会会長）へのインタビュー （2019年8月24日実施）

今 林 直 樹

1. パーントゥ

パーントゥは宮古島島尻集落に伝わる厄払いの祭祀であるが、その起源は不明である。パーントゥとは宮古島の方言で「怖いもの」「醜いもの」といった意味で、パーントゥは人や物などに悪臭を放つ泥を塗りつけて厄払いをする。

2. パーントゥの起源と仮面

島尻発祥の地である元島に「クバマ」という名前の海岸がある。「クバマ」というのは「クバの浜」ということで「クバハマ」、詰まって「クバマ」という。このクバマ海岸にクバの葉に包まれた木製の仮面が2つ流れ着いた。現在では仮面は「ウヤパーントゥ」「ナカパーントゥ」「ファパーントゥ」の3つある。ウヤパーントゥの仮面は元島の拝所に保管しており、ナカパーントゥとファパーントゥの仮面は伝統的に決められた家で管理している。

仮面は木製ということもあって壊れやすく、長く持つものではないので、必要に応じて新しく作り直している。ここ10年間では3回作り直した。仮面の製作は地元の大工さんが材木の残り物などを利用して作っているが、ウヤパーントゥの仮面だけは壊れたら料金を支払って作ってもらっている。ナカパーントゥとファパーントゥの仮面については、作りたいという希望者がいるので作ってもらっているが、製作料は無料である。

3. キャーン

パーントゥに欠かせないのが方言でキャーンと呼ばれる蔓草である。正式名称はシノキカズラという。パーントゥはこのキャーンを身体に巻きつける。以前はパンツ一丁の裸でキャーンを巻いていたが、身体が痒くなるので、今はランニングシャツの上から巻いている。キャーンについては、青年会のメンバーが野原に取りに行っている。しかし、蔓草は台風などが来ればすぐにだめになるし、最近は野原が少なくなっているため他の地区にも取りに行っている。島尻自治会としては蔓草の栽培を目的に宮古島市に補助金を申請しているが、現在、承認されていない。

4. ンマリガー

パーントゥは「ンマリガー」という井泉から出現する。30年くらい前までは、子どもが生まれたり、人が死んだりしたときに、ンマリガーの上澄みの水で清めていたが、今はやっていない。パーントゥはこのンマリガーから取った泥を自らの身体に塗り付け、集落を練り歩くときに誰彼かまわず、またところ構わず塗り付ける。各家々では宴会をやっているが、パーントゥは宴会しているところにも悪臭を放つ泥を塗る。

5. 祭祀の担当

パーントゥ祭祀には女性が行うものもあったが、20年ほど前からやっていない。神役の女性は「島尻生まれの女性」に限られているが、今ではほとんどの方が亡くなって、継承もうまくいかなかった。そのため、現在、パーントゥ祭祀は男性だけでやっている。祭祀日程についても、以前は女性が決めていたが、今は男性神職者であるピューズダスが決めている。

パーントゥに扮するのは青年会のメンバーである。青年会は高校を卒業してから39歳までのメンバーで構成されている。パーントゥ祭祀は2日間にわたって行われ、1日に3体のパーントゥが出現するので6名がパーントゥに扮する。

6. パーントゥの観光化

パーントゥが全国的に知られるようになり、今では観光客が多くなった。現在、パーントゥは宮古島観光の目玉になっており、遠くは北海道から観に来る観光客もいる。

ただ、そうなる困ったことも起きるようになった。何年か前に、泥を塗られて怒った観光客もいたので、新聞に「トラブルは一切受け付けない」との広告を出したこともあるが、現在ではトラブル対応のために見張り役を付けている。見張り役はパーントゥ1体につき1人で、パーントゥの後ろからついていく。パーントゥは泥を塗られたくなくて逃げ惑う人たちを追い駆けまわすのが醍醐味なのだが、人ごみの中でパーントゥが走れなくなっている状況がある。また、パーントゥに追い駆けて転んだり、骨折したりすることもあるので、事故には注意を払っている。また、防犯部による交通整理が大変なため、集落の者が祭祀に参加できないということも起こっている。

以前は、ンマリガーでパーントゥに扮する場面や、祭祀が終了して海岸で蔓草をはずす場面などを見せていたし、写真撮影も大丈夫だったが、現在では見せないようにしているし、写真撮影も許可していない。観光客が増えるのはいいのだが、やはり島尻の人びとにとっては祭祀なので、その点制限している。

7. パーントゥの今後

最大の懸念はやはり継承の問題である。今はいいが20年後にはどうなっているかとい

う不安はある。島の若者は高校を卒業すると進学や就職でほとんどが島を出る。Uターンは少なく、祭祀のときだけ里帰りする人もいる。もし、青年会のメンバーで対応できない状況になれば、パーントゥに扮する年齢を50歳代以上にも拡大せざるを得ないだろう。

パーントゥ自体から怖さや神秘性が失われていることも問題だろう。昔は街灯もなく、文字通り闇の中からパーントゥが現れたので、本来のパーントゥは怖い存在だったはずである。しかし、今は街灯があって明るいこともあり、姿かたち以外には怖さが消えているし、神秘性もなくなっている。逃げる子どもたちや人びとをパーントゥが追い駆けるという行為ももはや追いかけてこのような遊びに近いものとなっているので、やはり怖さがあったほうがいいのではないかと感じている。

2018年11月、パーントゥが「来訪神 仮面・仮装の神々」として「ユネスコ無形文化遺産」に登録されたこともあり、東京で来訪神の集まりがあったが、今のところ独自の祭祀儀礼を行っている地域との交流計画などは出ていない。島尻地区では、継承の問題も含めて保存会を起ち上げようという話が出ている。